

京都市学校歴史博物館研究紀要

第3号

目次

- 『研究紀要』第三号の発行にあたって (1)
- 論文 京都番組小学校の創設過程 和崎 光太郎 (3)
- 展覧会報告 栖鳳以後の京都画壇
—特別展「近代京都画壇を育んだ人たち」展示報告にかえて—
森 光彦 (15)
- 研究ノート 団体見学の拡充に向けて —平成二十五年度を振り返って—
車田 秀樹 小中 秀則 (25)

平成 26 (2014) 年 12 月

京都市学校歴史博物館

『研究紀要』第三号の発行にあたって

京都市学校歴史博物館は、平成一〇（一九九八）年一月に開館して以来、主に展示や講座・教室事業に積極的に取り組んできた。平成二三年度からは研究活動にも本格的に着手し、微力ながらその成果の報告として、翌二四年度より「研究紀要」を創刊することができた。

「年報」と抱き合わせという形での研究紀要ではあるが、今号で第三号となる。いわゆる「三号雑誌」にならないよう自戒を込めるとともに、今号の発行が例年より大幅に遅れたことをお詫び申し上げたい。

本号には、論文（和崎）、展覧会報告（森）、研究ノート（車田・小中）を一本ずつ掲載した。

論文（和崎）は、当館の存在意義・存在理由の根幹にある京都番組小学校がどのようにして誕生したのかを再検討する試みである。番組小誕生までの経緯は、わかっているようでわからないことが多い。例えば、日本初の学区制小学校誕生の地がなぜ京都だったのか、またそれがなぜ明治二（一八六九）年であり、なぜわずか半年あまりの間に六四もの小学校が誕生しえたのか、などである。これらの疑問に対しては、京都は江戸時代から教育が盛んであったから、財力があつたから、首都機能移転という危機感があつたから、など想定し得る回答が用意されることが多い。しかし、大切なのはそれらのことを史実に基づいて具体的に解明することであり、そのためにはまず、どの「事実」

が何によって実証されているのかという「証拠開示」の作業が必要である。ただし本稿は、先行研究の整理と検討、史料の再検討にとどまっております、まだ生煮えの研究の域は出ない。今後も継続してこの課題に取り組みたい。

展覧会報告（森）は、本紀要と合冊になっている「年報」の一三頁において紹介されている当館一五周年記念特別展の作品紹介を兼ねている。本稿では、竹内栖鳳以後に活躍した画家のうち九人をピックアップし、「後の京都画壇を担う画家たちの道標」が栖鳳門下生によつていかに継承・形成されたのかを問うている。興味を持たれた方は、同特別展の図録（当館または当館HPにて販売）もあわせてご参照いただきたい。

研究ノート（車田・小中）は、団体見学における、個人見学にはない利点を指摘するとともに、それぞれの団体が有するニーズへの対応のあり方と、来館する団体数の増加に向けた取組を紹介している。博物館の研究紀要において、教育普及活動を単なる数値や課題の報告にとどまらず、計画から実行、改善案までのサイクルを毎年報告する取組は、意外と少ない。今後も継続していきたい。

以上が本号の内容である。一人でも多くの方にお読みいただき、今後の研究、資料調査・保存・展示、博物館での教育活動に寄与できれば、幸甚の至りである。

（学芸員 和崎 光太郎）

京都番組小学校の創設過程

和崎 光太郎

はじめに

本稿では、京都番組小学校の創設過程を、従来の研究およびそこで用いられた史料・文献を再検討しつつ、明らかにしたい。

旧暦の明治二年五月から一二月にかけて（一八六九―七〇年）、京都で六四の学区制小学校が創設された。ここに言う「京都」とは、幕末から明治初頭にかけての京都市中のことである（以下同じ）。これらの小学校は、中世以来の自治組織「町組」が再編された「番組」ごとに一校が原則として置かれたので、「番組小学校」（以下、番組小）と呼ばれている。

番組小には、三つの特徴がある。まず、日本初の学区制小学校であること。次に、明治五（一八七二）年の学制頒布に先立った創設、つまり明治政府の政策に先行していたということ。最後に、地域が主体となって設立・運営したということである。

番組小に関する研究は、これまで教育史学・歴史学の分野において進められてきた。その嚆矢となったのは、後の番組小研究における基礎史料となる「政治部学政類」などを用い、近世の郷学校と近代小学校との連続性をとらえた倉沢剛による研究^二である。その後、町文書などをもとに番組小創設過程におけ

一 日本で最初の小学校は、明治元年一二月開校の沼津兵学校附属小学校である。ただし、同校は兵学校という特定の分野への進学を前提としており、学区制ではない。なお、元番組小の中で統廃合を経ずに小学校として存続しているのは、平成二六（二〇一四）年四月現在で六校（乾隆校・翔鸞校・正親校・京極校・醒泉校・淳風校）である。

二 倉沢剛『小学校の歴史 III』（シヤパンライブラリービューロー、一九七〇

る町組の果たした役割を考察した辻ミチ子による研究^三によって、番組小の存在は広く知られるようになった。

現在でも番組小のことを知るための最もベーシックな研究は両書であり、このことは両研究の水準の高さを物語っている。ゆえにここで改めて番組小創設過程を問うことは、屋上屋を架すことになるかもしれない。しかし、両研究が発表されてすでに四〇年ほどが経過している。その間、学区制度史研究や地域運営学校（コミュニティスクール）研究など番組小をとらえる新たな歴史的視座が誕生し、幕末から明治初頭にかけての京都史研究の蓄積も進んでいる。また、倉沢・辻の両研究において用いられている史料についても、再検討が必要だと思われるものが散見される。特に、戦前に編まれた『京都小学三十年史』^四『京都小学五十年誌』^五『京都府教育史 上』^六『公同沿革史 上』^七の記述については、何を根拠にしているのか、根拠となる史料は現存しているのか、現存していないならば他の文献にどのように記載されているのか、などを確

年）八七一―一五〇頁。

三 辻ミチ子『町組と小学校』（角川書店、一九七七年）九三―一六八頁。なお『町組と小学校』は後に辻ミチ子『転生の都市・京都 民衆の社会と生活』（阿吽社、一九九九年）に「I 民衆と町自治——町組と小学校」として採録されており、本稿での引用等は後者から行った。

四 京都市小学校創立三十年記念会編『京都小学三十年史』（一九〇二年）、京都市役所『京都小学五十年誌』（京都市役所、一九一八年）、京都府教育会『京都府教育史 上』（京都府教育会、一九四〇年）、秋山国造『公同沿革史 上』（京都市公同組合聯合会事務所、一九四四年）。『公同沿革史 上』は後に加筆修正されて『近世京都町組発達史（新版・公同沿革史）』（法政大学出版局、一九八〇年）として刊行。

認・検討した上で、参照しなければならない。

そこで本稿では、一次史料および先述の四つの文献に立ち返り、番組小の創設過程を再検討したい。ただし、番組小のことをより深く知りたいという一般の方五を読者対象とするという本稿の位置づけ及び紙幅の都合から、引用文は必要最小限にとどめた。なお、番組小創設に関する史料及び文献の性格については、中岡義介・川西光子^六によってすでにまとめられているので、そちらを参照されたい。

一 幕末から明治初頭にかけての京都

番組は、明治元年から翌年にかけて町組が再編されたことで誕生した組織である。町組とは、天文年間（一五三―一五五年）の初めごろに成立した町の連合体であり、自治組織として機能してきた。町組のあり方は時代によって変化してきたが、町間、町組間での厳然とした経済格差は残り続けたとされる。また、近世における町組の規模は、一一町から一六〇余の町までさまざまで、幕藩体制下に入ること次第に自治・反権力の意識が萎縮していったとされる^七。では、なぜ明治初年に町組が再編され、再び歴史の表舞台に登場したのだろうか。

安政六（一八五九）年、開港によって生糸の輸出が開始され、その結果、西陣が原料不足に陥り大打撃を受ける。次いで元治元（一八六四）年、京都を舞

五 京都市教育委員会・京都市学校歴史博物館編『京都 学校物語』（京都通信社、二〇〇六年）など番組小に関する入門書を既読であることを念頭に置いている。

六 中岡義介・川西光子「京都・番組小学校に関する研究（一） 番組小学校の設立にかかる史料の編年化」兵庫教育大学編『兵庫教育大学研究紀要』（第三二卷、二〇〇七年）一〇一―一一六頁。

七 以上、町組については前掲『転生の都市・京都 民衆の社会と生活』二一五頁を参照。

台に対立していた会津・薩摩と長州が惹き起こした蛤御門の変（禁門の変）に端を発したいわゆる「どんどん焼け」によって、洛中（特に下京）の多くの家・寺社が焼かれる。さらに慶応二（一八六六）年夏には大暴風雨に襲われた。一方で、幕末には政治の中心が江戸から京都へ移り武士が大量に流入、東北地方の冷害による飢饉の影響もあり、元治元年から急激に物価が高騰した。元治元年から慶応三年にかけての物価（春価格）は、白米が六倍、味噌が三・五倍、醤油が三・九倍になっている^八。

このような状況の中、「公」の担い手としての町人が台頭する。慶応二・三年の京都町奉行所による救済活動の内実は、教諭所や心学講舎を支える有力商人との関係を深めていた平塚飄齋ら改革派与力が主導したものであり、結果として都市行政の担い手となる有力町人が台頭した。ただし、町による共同抛出の割合は小さく、抛出は教諭所や心学講舎からの働きかけに呼応した個々の商家や有志によるものが圧倒的だった^九。商家の中でも鳩居堂の熊谷直孝は、どんどん焼けや鳥羽伏見の戦いに際しての救済活動において、倒幕から新政府成立までの間、「京都市行政を實質的に担っていた」^{一〇}という働き振りだった。

慶応三年二月、王政復古の大号令により京都に明治政府が設置された。翌月から始まる戊辰戦争のさなか、京都では慶応四年閏四月二十九日に京都府が成立し、都市構造に変革を迫る政策が執られた。

新しく設置された府は、幕末の混乱からの復興を目指し、町組の再編に執りかかる。まず、慶応四年六月初頭に上京・下京それぞれの町の年寄を集め、「御

八 以上、京都市編『京都の歴史 第七巻 維新の激動 新装版』（京都市史編さん所、一九七九年、初版は一九七四年）一〇四―一二四頁を参照、物価については同一七二、一七七頁を参照。

九 以上、小林文広「幕末維新期の都市社会 都市行政の変容と町奉行所与力」宇佐美英機・藪田貫編『江戸』の人と身分―都市の身分願望』（吉川弘文館、二〇一〇年）一八一―二二二頁。

一〇 小林文広『明治維新と京都―公家社会の解体―』（臨川書店、一九九八年）八八頁。

一新」後に相応しい民の生活基盤を町の力によって創り上げる方針を宣言する。二。次いで、翌年には町組を再編させる町組五人組仕法を公示する。この仕法では、親町・古町・枝町など町と町の間を力関係を表わす名称をすべて廃止し町同士の間を改善すること、上京・下京それぞれに置かれる大年寄が洛中町民の互選から京都府知事の特選となること（ただし町組の中年寄・添年寄は町組内の入札による互選）、上京（四五の町組）と下京（四一の町組）の境界を二条とすること、各町組に番号を付け町組の名称を「上（下）京〇番組」とすることなどが定められた^{三〇}。同年八月二五日までの間に、町組の規模が揃えられないのだが、小さい町組は五―六町、大きな町組は三四―三五町と組の規模がばらばらのままであり、しかも散在地での町組も存在した^{三一}。つまり、この町組再編は不完全なものに終わったが、再編によって町・町組が再び力を持ち始めたことは「未曾有の大改革」^{三二}と評されるにふさわしく、この改革は後の番組小創設において「番組」^{三三}「学区」の創出という点で非常に重要なことであった。

この町組再編の後から番組小誕生までの期間、近代京都への変革を迫る上で重要な、かつ国家レベルでの政策が実行された。東京奠都^{三四}である。まず、慶応四年九月に明治に改元され、明治天皇が東幸、同年二月に還幸する。明治二（一八六九）年二月に今度は番組小設置を念頭に置きつつ町組が再編成される（後述）、その翌月、再び天皇が東幸。この際には、同時に太政官が東京へ移さ

- 二 前掲『近世京都町組発達史（新版・公同沿革史）』三四四―三四六頁。
- 三 前掲『京都府百年の資料 一 政治行政編』二九―三二頁。
- 三 町組五人組仕法が出されるまでの経緯とその内容、五人組の機能や町組再編の結末などについては、前掲『近世京都町組発達史（新版・公同沿革史）』三四四―三六二、三六七―三七二頁を参照。
- 四 前掲『近世京都町組発達史（新版・公同沿革史）』三五五頁。
- 五 同年七月に江戸は東京と改められていた。また、京都を都として廃する宣言がなされず東西両京とされたため、実態は遷都（都を移す）だが正式には奠都（新たに都を置く）である。

れた。この明治元年九月から翌年三月という時期は、番組小創設にあたって京都府と町衆が意見をやり取りし、具体的な創設準備に入っていく時期（後述）と完全に重なっている。その後、皇后行啓事務が下京五番組小学校（後の生祥校）で権大参事榎村正直（一八三四―一九六、後に京都府二代目知事）を中心に進められ、同年九月、皇后東幸に反対する番組（西陣周辺の上京一・二・三・四・五番組、本願寺門前の下京十六・十九番組）によるデモが発生する^{三六}。このデモは、奠都により「商売相手」であった公家等が京都から出ていった結果の生活への不安から勃発しており、府はこれに対し、反対運動をしなかった番組に褒詞を与えるという懐柔策を行う^{三七}。結局、同年一〇月に皇后も東幸し、事実上の東京遷都が達成される。

以上のような、幕末から明治初期にかけての混乱、そして事実上の遷都によって、洛中の人口は大きく減少した^{三八}。幕末から明治初頭にかけての京都は、自然災害と政争の被害が甚大であり、幕末には有力商人等の有志、明治初頭にかけては府・民の力を終結して、復興が進められていくことになる。その明治初頭の復興の主役となったのが、二度の編成替えによって生まれ変わった町組^{三九}だった。以下に述べる番組小創設への動きは、このような時代背景のもとで初めて可能となったのである。

- 三六 前掲『明治維新と京都―公家社会の解体―』八九―九〇頁。
- 三七 小林文広「明治維新期の『市長』奈良大学史学芸編『奈良史学』（二一九号、二〇一二年）七〇頁。なお、この反対運動とそれへの府の対応、大年寄の動きに関する資料は、京都府立総合資料館編『京都府百年の資料 一 政治行政編』（京都府、一九七二年）一四―二〇頁にまとめられている。
- 三八 具体的な数値は明らかではないが、幕末の人口減少については前掲『京都の歴史 第七巻 維新の激動 新装版』三四―三七頁、浜野潔『近世京都の歴史人口学的研究 都市町人の社会構造を読む』（慶応義塾大学出版会、二〇〇七年）二二三―二三七頁を参照されたい。

二 小学校創設への動き

番組小創設に向けた最初の動きは、『京都小学五十年誌』に収録されている、慶応三(一八六七)年丁卯仲夏(陰曆五月)に京都町奉行所へ出されたとして



西谷良圃

される「教導所」建議文の草稿である^{一九}。この草稿には、京都中心部である高倉錦小路上ル貝屋町に位置する手跡指南所「篤志軒」の八代目当主、西谷良圃(号・淇水、一八二四―一九二)を筆頭に、熊谷直行(熊谷直孝の息子、鳩居堂八代目当主)・遠藤茂平(書林平野屋茂兵衛二、書家)・八木真幸・幸野楳嶺(四条派画家)・千田藤兵衛(素封家)が名を連ねている。この草稿は、「人幼時ニシテ不学時ハ、生涯身ヲ全クシ、家事ヲ修ムルコト不能」という視点から「幼児」の教育の必要性を訴えており、学ぶべき内容として「素読」「手跡」「算数」が挙げられている^{二〇}。さらに同年二月の大政奉還後には、西谷による「大学寮御復興の事」の建議がなされている^{二一}。建議の内容は不明だが、古代律令制

一九 前掲『京都小学五十年誌』五八頁。同書には「慶応二丁卯年」とあるが、丁卯は慶応三年に該当するので「二」は誤植であろう。前掲『京都府教育史 上』二五六頁ではこの建議文の題が「幼童教導之弁」であると記されているが、建議文および草稿は現存していない。
二〇 西谷および篤志軒については、前掲『京都府教育史 上』二二九―二三〇頁に詳しい。
二一 明和年間(一七六四―一七七一)の創業、六角通柳馬場東入ル(京都書肆変遷史編纂委員会編『京都書肆変遷史』京都府書店商業組合、一九九四年、三二―八頁)。
二二 この三課は明治二年五月に制定された「小学規則」に「筆道」「読書」「算術」として反映されている(『政治部学政類 第一 京都府』佐藤秀夫編『府県史料 教育一五 京都』ゆまに書房、一九八六年、四三―四五頁)。
二三 前掲『京都府教育史 上』二五六頁。西谷の墓碑に記された森寛齋の撰文

における大学寮を復興するという建議の形式からは、手習塾(寺子屋)をモデルとした学校ではなく、手習を終えた子が通っていた郷学校・藩校に近い学校、つまり前述の「教導所」とは性格を異にした学校の創設が建議されたと考えられる。ともかく、幕末の京都が政治的な混乱に加え町衆の生活が危機に直面していた時、京都の有志たちによってすでに新時代の幕開けが見えられ、その新時代に相応しい学校の必要性が認識されていたのである。

京都府が成立した直後の同年五月から九月までは、長州出身の政府参与広沢真臣(一八三四―一八七二)が京都府御用掛を兼任、以降は同年八月三〇日に京都府へ出仕した長州出身の議政官史官試補榎村正直が小学校建設のために尽力することになる^{二四}。初代京都府知事は「名譽職の公卿」として長谷信篤があたりしたが、実際は近代京都の原型が広沢・榎村等の働きによって創られ始めたのである^{二五}。

なお、西谷は広沢らとともに、萩出身の円山派画家であり幕末には長州藩の密使であった森寛齋(一八一四―一九四)の屋敷にて指導を受けたとされる^{二六}。この「寄合」についての一次史料は現存を確認できておらず、すでに失われたと思われる。「寄合」の唯一の根拠となっているのは、『京都小学五十年誌』に

には、慶応三年二月に太政官に建議したとある(二〇一四年九月著者確認)。この撰文は日彰百年誌編集委員会編『日彰百年史』(一九七一年)一四―一五頁に所収されている。

二四 前掲『京都の歴史 第七巻 維新の激動 新装版』五〇三―五〇四頁。
二五 佐々木克「維新政権の官僚と政治——広沢真臣について——」京都大学人文科学研究所編『人文学報』(四七号、一九七九年三月)一一八頁。その後榎村は驚くべき早さで出世する。明治二年七月に府権大参事に就任してから府政の実権を握り、明治一〇年一月には府知事に就任している。榎村については、前掲『明治維新と京都——公家社会の解体——』九〇―九四頁を参照。
二六 前掲『京都小学五十年誌』五七―五八頁。森については、勝津吉生「円山派と森寛齋——応奉から寛齋へ——」山口県立美術館編『円山派と森寛齋——応奉から寛齋へ——』(一九八二年)二四―二五、一三八―一三九頁を参照。当時の森宅の場所については諸説ある。

記載された典拠不明の以下の文である。「西谷淇水氏（良圃）等慶応初年より、学校創設の為に奔走し、知友に謀りて財源を求め、又萩藩の名士広沢平助氏等と、屢々森寛斎氏の宅に会合して、其指導を受け企画する所あり」^{二七}。まず「慶応初年」をどう解釈するか。この引用文には、続いて、先述した慶応三年五月の「教導所」建議文の草稿が記載されている。ゆえにこの記載の順序からは「寄合」を慶応三年五月以前のことと読むのが自然である。しかし、第二次長州征討とその後の倒幕運動のただ中であるこの期間に、広沢が幕府の拠点である京都で学校創設について話し合うということは考えられない。森と広沢それぞれの行動を追っても、この期間に両者が京都に揃った時期は確認できない^{二八}。ゆえに、この「寄合」が事実であるとすれば、森が京都に向出した慶応四年四月一二日^{二九}から西谷が京都府に「口上書」（後述）を提出した同年八月までのことだと考えられる。しかし、前掲「広沢真臣関係文書」に所収されている当時の簡略な日記には、森が京都に到着したという記述があるものの、「寄合」に関する記述がない。以上のように、この「寄合」については不明な点が多々ある。ただし少なくとも、『京都小学五十年誌』が編まれた際に残っていた史料に森と広沢が登場すること、そして番組小創設の実務を担ったのが榎村であったことから、小学校創設を「上から」担ったのが主に長州出身者であったことがわかる。

幕末の町奉行所に学校創設を建議していた西谷は、町組再編のさなかである^{三〇}。前掲『京都小学五十年誌』五八頁。なお、西谷と森が広沢の指導を受けたとする見解もあるが、この記述からは森が西谷と広沢を指導したと解釈するのが妥当だろう。

^{二八} 森については前掲「円山派と森寛斎——心拳から寛斎へ——」二三八—二九九頁、広沢については国立国会図書館憲政資料室「広沢真臣関係文書目録」巻末附録「広沢真臣略年譜」（二〇一四年一月二日閲覧）を参照。

^{二九} 大塚武松編『広沢真臣日記』（日本史籍協会、一九三二年）慶応四年四月四日、七七頁。同日記は、国立国会図書館憲政資料室所蔵の「広沢真臣関係文書」の一部を活字化したもの。

同年八月、市中に「小学校」を^{三〇}—^{三一}二ヶ所設置し、一校あたりで^{三二}〇〇—^{三三}二〇〇人を学ばせるという「口上書」「仕法書」^{三〇}を府に提出する。ただし、この建議文も現存しておらず、詳しい内容はわからない。また、遠藤茂平も同時期に「小学校創立法の論並用途見込之弁」^{三三}という建白書を府に提出したようであるが、これも現存しない。

これらの建白を受けた京都府は、同年九月二七日に小学校設立計画を示達する。この達は府から出された小学校設立に関する最初の文書であり、その内容には、西谷等による慶応三年の「教導所」建議文の草稿と、明治元年の西谷による「口上書」「仕法書」の内容が大きく反映されている^{三四}。なお、この達も現存していないのだが、『近世京都町組発達史（新版・公同沿革史）』に記載されているこの達の内容に『京都小学五十年誌』における「教導所」建議文の草稿の内容と、『京都府教育史 上』における西谷の「口上書」「仕法書」の内容が、ともに反映されていることは重要である。というのも、このことは、慶応三年の「教導所」建議文の草稿をもとに西谷の「口上書」「仕法書」が書かれたということ、つまり「教導所」建議文の草稿が西谷を中心に起こされ、慶応三年時点での西谷による小学校構想が明治元年の府の小学校構想に反映されたということを示すからである。

この達に対し、町組改組後の町や町組が意見を申し出ること、番組小の青写真が次第に具体化されていく。上錫屋町の町年寄と議事者名で中年寄を通して京都府宛てに出された小学校設置についての言上書控には、計一四項目の町側の要望が述べられている^{三五}。例えば、一校が生徒数^{三六}〇〇〇人規模だと、生

^{三〇} 前掲『京都府教育史 上』二五六—二五七頁。いち早く「小学校」の名称が用いられた理由は、「西谷家に伝ふる文書（現存せず）を根拠に、慶応二年刊行の福沢諭吉『西洋事情 初編』の影響だとされている。

^{三一} 前掲『京都府教育史 上』二五七頁。

^{三二} 前掲『近世京都町組発達史（新版・公同沿革史）』三八八—三九〇頁。

^{三三} 「小学校気附申上候書付控」（上錫屋町文書）C-14、京都市歴史資料館蔵。

徒はこれまでの手習塾の師匠を慕い、また師匠は生徒への教授が行き届かないなど、実際に学ばせるにあたって予想されうる問題点を念頭にした申立てになっている。また、下京六番組による「口上書」では、小学校建営に前向きだが入学年齢を一五歳としたい旨が述べられている^{三〇}。

これら町または番組からの意見は総じて現実的なものであった。それに府が応えたものが、同年一〇月八日に出された告示である。この告示には小学校建営について「衆議公論ヲ到採用度」と明言されており^{三一}、府が町衆の力を汲み取り活用することで新しい小学校を創設しようとしていたことがわかる。また西谷は、この告示とほぼ同時期に同年八月に出された前述の「仕法書」を訂正し学校建設の具体案を述べた「言上書」「見聞記」をまとめており、そこで上京と下京それぞれにせめてまずは一校、急設したい旨を述べている^{三二}。西谷が町衆からの意見に鑑みて、小学校創設は前途多難であると認識していたことがうかがえる。ただし、京都全体の機運は小学校創設に向かっていたと考えていいだろう。というのは、西谷以外にも、御用書林村上勘兵衛を筆頭に他書肆（しよし）九名の献金申し出「村上勘兵衛ら献金申出の口上書付本府口論」があるなど^{三三}、明治元年一〇月の時点で、すでに小学校創設に向けた動きが府・町衆・京都市中の有志、有力商人などを巻き込んだものになっていたからである。

三〇 前掲『京都府教育史 上』二五七頁。この口上書は「下京六番組」の中年寄吉田勘兵衛、山田長左衛門によって提出されている。時期が第二次町組改正前であることと、山田長左衛門『平安人物誌』記載の同名人物の子孫だと考えられる^三の名から、「下京六番組」は同改正前の番組（ほぼ後の柳池学区）と考えられる。

三一 「政治部学政類 第一 京都府」（明治元年十月八日）（前掲『府県史料 教育一五 京都』三頁）。

三二 前掲『京都府教育史 上』二五七頁。

三三 京都府立総合資料館編『京都府百年の資料 五 教育編』（京都府、一九七二年）二一三頁。

三 概念としての番組小の誕生

前節で述べたように、府は明治元（一八六八）年九月末に最初に小学校設立計画を打ち出してから二ヶ月あまりの間に、町衆の意見を汲み取り、同年一月二〇日に町年寄と議事者を集めて小学校設立について口論する^{三四}。これがいわゆる「小学校設立に関する府の口論」であり、府はそこで町衆にとって実利のある形で小学校の具体的な姿を示す。この口論は、後に「小学校建営之事先達テ相談ニ下シタル処快ク承諾シタル町モアリ種々難渋申立断リ出タル町モアリ」^{三五}と語られるような状況への対応だった。ともあれこの口論で、町衆からの要望であった町組会所兼小学校の構想が初めて府によって示されたのである^{三六}。

具体的には、各町組に一つの小学校を開校すること、学校としてだけでなく地域のコミュニティ・センターとしての機能を持たせること、小学校運営資金を各戸で拠出すること、などである。「裏家住居之者モ一籠ヲ構ヘ朝夕ノ煙ヲ起ルモノハ皆半季一分ノ出金ト申事ナリ」と口論されているのだが、ここに言う「籠」とは戸の例え、「半季」とは半年のことである。つまりこの「出金」は、近世以来の「軒役」のように借家住まいの者は負担せず家持が多くを負うのではなく、家持借家にかかわらずすべての戸が拠出するものであった。また、金一分とは二五銭、現在のおよそ二五〇〇円ほどである^{三七}。すなわち、このいわ

三四 前掲『京都府百年の資料 五 教育編』三一五頁。

三五 「小学校設立に関する府の口論」（明治元年一月二〇日）前掲『京都府百年の資料 五 教育編』三頁。

三六 文部省編『文部省年報第三 明治八年』（一八七五年）四五頁にも、町組会所と小学校を一つの建物とすることは、町衆の側からからの意見が反映されたと記されている。

三七 京都市教育委員会・京都市学校歴史博物館編『京都学校物語』（京都通信社、二〇〇六年）六七―六八頁。

ゆる「竈金」は、負担の少ない額をすべての戸から掘金させることを目指した集金手段だったのである。このことは、竈金のねらいが学校運営費の確保のためである以上に、すべての町衆に「自分たちの学校」であるという意識を持たせることにあったことをうかがわせる。すべての子が小学校に通うこと、地域のコミュニティ・センターとしてすべての地域住民がこの学校に関わることが、府によって意図されていたのではなからうか。

しかし、この明治元年一月二〇日の口論を受けて小学校設立を承諾した町組は、同年一月三〇日の時点で全体の三八・四％（上京一七、下京一六の町組）にとどまっていた^{四三}。そこで府は、翌月に様々な手を打つ。まず、小学校建営の世話役であったと考えられる小学校取建掛を下京に同年二月一日、上京にその翌日、それぞれ一名ずつ任命した^{四四}。さらに同月六日、府は新たな布達^{四五}を出す。この布達は、府・有志者・町衆の思惑が集積されて誕生したものであり、番組小学校の青写真が初めて具体的に描かれた文書であった（文末資料^①）。そこには、一月二〇日の口論がより具体化されている。校舎建設費は、町組会所と合併の小学校なので下付金の半分は利息なしで一〇年以内に返済、残り半分は返納不要とすること。維持費である「竈別半季一分之出金」は町または町組内の「竈数」（戸数）にあわせて出金高を整えるよう提案すること^{四五}、などである。また、府はこのいわゆる「竈金」の徴収を徹底するよう、直後に追加の達を出している^{四六}。

四二 前掲「政治部学政類 第一 京都府」四頁。当時は二度の町組再編の端境期にあたり、町組の境界線が近世末とも明治二年二月以降とも異なる。よって承諾した町組としなかつた町組との経済格差等の比較検討は困難を極めるので、今後の課題としたい。

四三 前掲『小学校の歴史 Ⅲ』九九頁。

四四 「小学校設立様式の布達」（前掲『京都府百年の資料 五 教育編』五—六頁）。

四五 「出金調ヒガタキモノアリテモ其組ノ富有篤志之者ヨリ相助ケテ竈数ノ出金高ヲ調ヘ」（前掲「小学校設立様式の布達」）。

四六 「かまど別小学校建営出金の達」（前掲『京都府百年の資料 五 教育編』

この布達には、小学校の建営図面が初めて描かれた（文末資料^②）。図面では小学校に役所の出張所や警察としての機能が組み込まれている一方で、それらは教室など「子どものスペース」とは厳密に分けられている^{四七}。地域のコミュニティ・センターとしての番組小の姿が、手本として示されたのである。

同月二六日、榎村は「小学校ヲ府下ニ盛興セントシ、方サニソノ建営ニ従事」し、「議論噴出」する中で各方面の「斡旋」にあたるなどの功績を認められ、府から「刀具三種」を贈られている^{四八}。番組小創設において榎村が具体的にどのような役割を果たしたのかはわからないが、榎村がその功労者であったことは間違いないだろう。このような京都での小学校創設の動きは、明治政府の動きに先行していた。そもそも当時はまだ戊辰戦争のさなかであり、ようやく東京でも小学校創設に向けた議論が始まった頃であった。例えば、「小学校設立様式の布達」が出されたのと同じ一二月に木戸孝允が「普通教育ノ振興ニツキ建言書案」の中で「一般人民之智識進歩ヲ期シ、文明各国之規則ヲ取捨シ徐々全国ニ学校ヲ振興シ大ニ教育ヲ被為布候儀、則今日之一大急務ト奉存候」と述べ、翌月には伊藤博文が「国是綱目」の中で「欧州各国ノ如ク文明開化ノ治ヲ開」くための「府藩県ヨリ郡村ニイタル迄小学校ヲ設ケ」ることの必要を説いている^{四九}。当時はまだ木戸と伊藤が全国に学校設立の必要性を認めた段階であったが、その後の明治政府は、番組小の創設とその後の様子を鑑みつつ全国に小学校設置を進めていったとされる^{五〇}。

六頁）。

四七 小林広育はこの建営図面を考察し、動線も大人と子どもで分けられていることを明らかにしている（小林広育「京都市における小学校校舎の成立と発展に関する史的研究」修士論文、京都府立大学大学院生活科学研究科環境科学専攻史的住環境学講座、一九九二年二月）一〇—二五頁。

四八 前掲「政治部学政類 第一 京都府」五一—六頁。

四九 本山幸彦『明治国家の教育思想』（思文閣出版、一九九八年）二二—三二頁。

五〇 石島庸夫「京都番組小学校創出の郷学的意義」講座『日本教育史 第二巻』（第一法規、一九八四年）二五〇—二七六頁。

一二月六日の布達によって小学校の具体的な姿が示されたといっても、それ
で全町組の三八・四％しか小学校創設に同意していないという状況が乗り越え
られるわけではなかった。というのも、小学校創設にあたっての最大の問題は、
町組間の経済格差や飛び地の問題などにあつたからである。そこで府は再度、
町組の再編を行う。この再編は、明治二（一八六九）年一月二十九日の布告に基
づいて行われ、町組の改革を徹底したものであつた^{五二}。すなわち、三条通以北
を上京、以南を下京とし、六五（同年中に六六となる^{五三}）の番組を誕生させ、
一つの番組あたりの町数平均は約二五・四町、最大で三七町、最小で六町、二
〇町以上二九町以下の番組は四〇組（すべて境内は除く）と^{五四}、「番組内の町
数」においてかなりの均質化が図られたのである。この改革は、上京元三十四
番組（後の春日学区）が番組の中央に「小学校並会議所」が位置するように^{五五}、
一筋縄ではいかなかったようである。しかし、後にこの編成替え通りの番組で
小学校が創設されていることから、辻ミチ子が「京都府の強力な指導、大年寄
以下町役の町組改正の意義の理解の上に立つた説得などが功を奏し、町民のな
かでは大きな反対運動もなく町組は改正されることになった」^{五五}と評している
ように、最終的には町衆の有力者が府の意図を汲み取り、かつ実利を理解し他
の町衆に理解を求めるといふ構造のもとで編成替えが可能になったと考えられ
る。

五二 前掲『近世京都町組発達史（新版・公同沿革史）』三七三―三七八頁。

五三 下京二十四番組（後の有濟学区）から下京三十三番組（後の弥栄学区）が
分離独立。ただし、先に下京三十三番組小学校（後の弥栄校）となる校舎が設
置され、後から下京二十四番組小学校（後の有濟校）の校舎が建てられた（前
掲『京都小学三十年史』七九五、八〇九頁）。

五四 前掲『近世京都町組発達史（新版・公同沿革史）』三七四―三七八頁の表を
もとに算出。

五五 「柴田よし氏所蔵文書 明治二年二月四日」（京都史編『史料 京都の歴史
第七巻 上京区』（平凡社、一九八〇年、一八二―一八四頁）。

五五 前掲『転生の都市・京都 民衆の社会と生活』九四頁。

四 番組小の創設

番組小の具体的な姿が示され、二度の町組再編が完了しつつあつた明治二（一
八六九）年二月以降、各番組で番組小の創設が急速に進んだ。当時の各番組に
おける人口及び戸数はわからないが、戸籍法施行後の明治六（一八七三）年
における各元番組（明治五年五月以降は番組という名称は正式には用いられなく
なるので「元番組」と表記する）における平均人口は約三六二七人（最大五八
五四―最小一六八四）、明治一四（一八八一）年の平均戸数は約一〇〇六戸（最
大一七三三―最小四七二）^{五六}であり、これは明治二年からさほど変わっていな
いと思われる。六六の各番組で番組小を設置することが目指されたが、結局二
つの番組で一つの協立小学校としたところが二箇所あり、合計六四の番組小が
同年のうちに開校することとなった。最初の開校式は、同年五月二日、上京
二十七番組小学校（後の柳池校）にて行われた。

校舎の見取図は各学校によって異なるが、おおそ明治元年一二月の布達に
示された建営図面に基ついている^{五七}。先行研究から重要な点を三点ほど確認し
ておこう。まず、二階建ては約半数でそのうち総二階建ての校舎はほとんど建
てられなかったということ。これは、資金繰りの問題だと考えられる。次に、
大人の入口である「玄関」が重要視され、間取りも教室（子どものスペース）
と町組会所の部分（大人のスペース）が明確に分けられ、町組会所の部分が玄
関に近く置かれていたということ。小学校と町組会所の複合施設といえども、
町衆の立場からは町組会所の役割が重要だと考えられていたことがうかがえる。

五六 寺尾宏二『明治初期京都経済史』（大雅堂、一九四三年）五三〇―五三四頁
の表をもとに算出、ただし明治一四（一八八一）年の格致学区における戸数三
二二〇戸は明らかに誤植なので省き（同年同学区人口が三三二〇人）、六三学区
の平均を記した。

五七 前掲『京都市における小学校校舎の成立と発展に関する史的研究』二六一
六一頁。

最後に、男筆道場と女筆道場の広さが多くの学校で等しくされたということ。これは、府が描いた設立様式では男筆道場の方が広く設けられていたにもかかわらず、京都では全国に比して女子の就学率が高かったことに対応したと考えられる^{六〇}。

校舎建設への道筋は、各番組によって様々だった。例をいくつか挙げておこう。上京二十七番組小学校（後の柳池校）は、中年寄熊谷直孝が自身の経営する有信堂^{六一}を校舎として提供。建設費は大半を熊谷が負担するとともに番組内の有志からの出資となっている^{六二}。下京四番組小学校（後の日彰校）は、元京都教諭所の土地・家屋を購入し、さらに隣接地を中年寄遠藤弥三郎・添年寄市田理八が購入、寄付している^{六三}。下京六番組小学校（後の立誠校）は、村上和光が経営する寺子屋の用地（河原町六角西入ル）を譲り受け、新校舎を設立している^{六四}。下京十一番組小学校（後の開智校）は、黒住教の「会所」を買収して設立している^{六五}。このように、どの土地を使うか、どのように校舎を確保するのかという問題は、番組によって様々であった。つまり、番組小学校の校舎設立（または確保）の過程は、その多様性こそが特徴だと言えよう。

^{六一}以上、前掲「京都市における小学校校舎の成立と発展に関する史的研究」五八―六一頁。女子就学率については、和崎光太郎「京都番組小学校にみる町衆の自治と教育参加（研究課題Ⅰ 地教法等の改定と教育ガバナンス（Ⅰ）―学校教育における共同統治を中心に―」（日本教育行政学会第四九回大会発表レジュメ、二〇一四年一〇月二二日、於東京学芸大学）を参照。
^{六二}嘉永三（一八五〇）年頃に四代目熊谷直恭が設置した種痘所。万延元（一八六〇）年頃にはここに「寺子屋を少し組織化した教育塾」が設置されたようである（鳩居堂の歴史 <http://www.kyukyodo.co.jp/about/history.html#no03>、鳩居堂、二〇一四年九月二日閲覧）。

^{六三}柳池校百周年記念行事委員会編『柳池校百年史』（一九六九年）一二頁。
^{六四}『沿革史 京都市日彰尋常小学校』（一九一五年）三頁。
^{六五}三須正太郎編『明治四十一年中秋編 沿革史 京都市立立誠尋常小学校』（一九〇八年）五頁。

^{六六}前掲『京都小学三十年史』八〇六頁。

校舎の建築費は基本的に各番組の町衆の醸金（きよきん）で賄われ、建設資金を学区で賄えない場合は前述のように府からの下付金（下渡金と貸下金）が約束されていた。いくつか例を確認しておこう。下京四番組小学校（後の日彰校）は、府からの下渡金が二五〇両、府からの貸下金が二五〇両、各町有志金が二四五両二歩と一六貫四八文となっている^{六六}。下京六番組小学校（後の立誠校）は、新校舎建設費を一九一四両と見積り、うち八〇〇両を府からの下付金で補っている^{六七}。下京十一番組小学校（後の開智校）は、建築修理諸費を一三八一両二朱と見積り、府からの下渡金と貸下金を三五〇両ずつ受け取ったが、各町の有志からの出金が九五八両一分集まり結局三〇四両三歩三朱の余りが生じたので、それを番組内の表借家の建設修繕費などに充てている^{六八}。このように下付金は八〇〇両を基準としつつ番組の事情にあわせて額は上下しており、下付金を受け取らず番組内ですべての建設資金を調達した上京十一番組（後の桃園校）、上京二十六番組（後の初音校）、上京二十七番組（後の柳池校）は、府から賞詞が与えられた^{六九}。このように番組の経済力によって府の支援額に変化があったことは^{七〇}、府が各番組にできるだけ自力で小学校を設置することを期待したことの表れだろう。

ただし府は、軒割方式で集金することを強く諫めていた。というのも、あくまで方針は「建管之入費ハ当府ヨリ下ケ渡」すとされていたからである^{七一}。ゆえに府は明治二年四月から五月にかけて、「会所兼用之小学校」といえども設置費を「戸別」で出すことは「心得違」であり、「戸別」で費用を徴収した町役人は速やかにそれを返還することを指示する。一方で、分に応じた「志」に基づ

^{六八}前掲『沿革史』三頁。

^{六九}前掲『明治四十一年中秋編 沿革史 京都市立立誠尋常小学校』六頁。

^{七〇}京都市開智尋常小学校「開智」（駿々堂出版部、一九四〇年）三三―三五頁。

^{七一}前掲『近世京都町組発達史（新版・公同沿革史）』四〇〇頁。

^{七二}額は五五〇両から八八〇両の範囲内だったようである（前掲『近世京都町組発達史（新版・公同沿革史）』三九九―四〇〇頁）。

^{七三}前掲『政治部学政類 第一 京都府』七頁。

いた「差出」には「賞感事」としている。つまり、番組小運営費であるいわゆる「竈金」が全戸からの少額集金であったのは異なり、番組小設置にかかる資金や土地などは原則として府の予算で設置する方針であったが、一方で現実的には予算の問題から町衆の「志」を期待せざるを得なく、結果として番組小が「番組立小学校」としての性格を強めることになったのである。

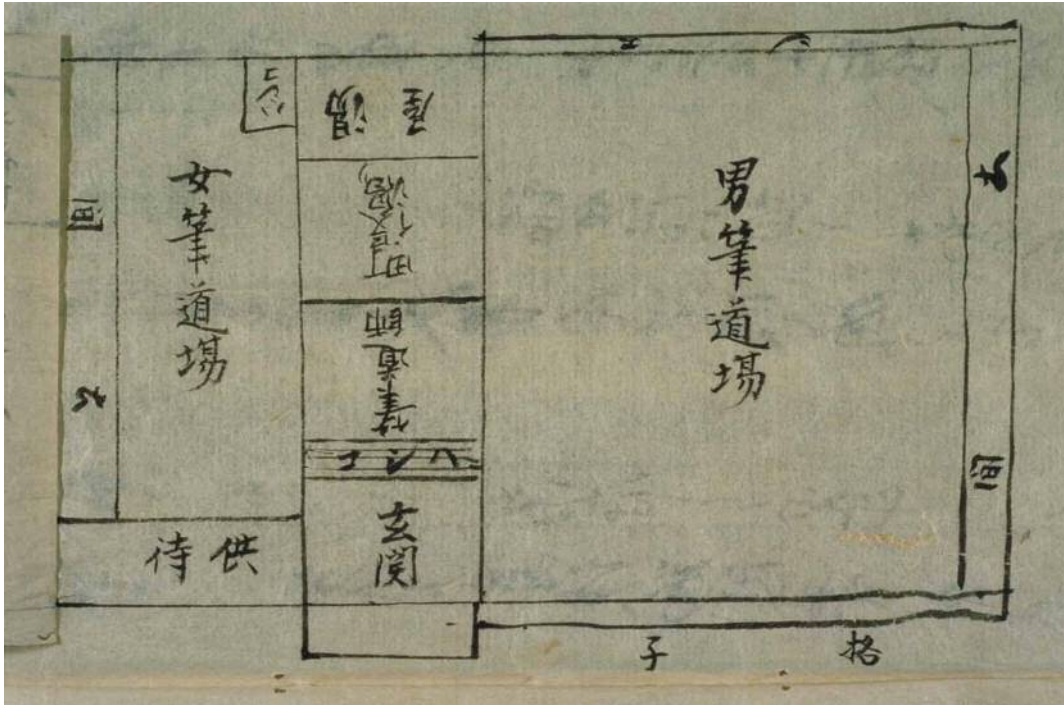
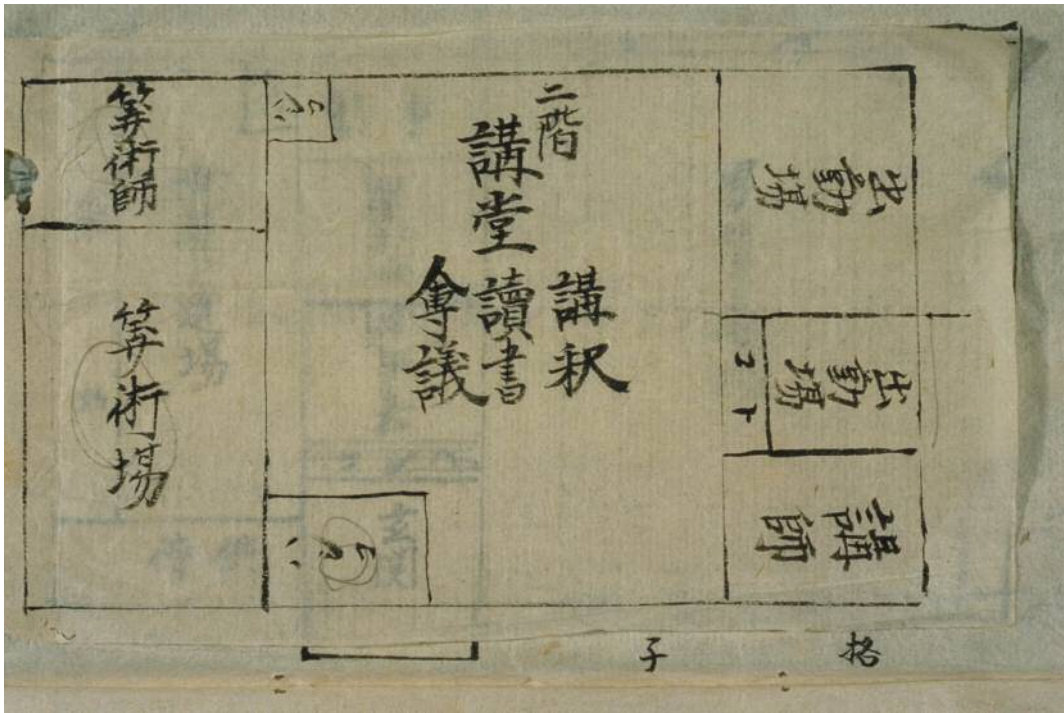
稿を予定している。

おわりに

以上、本稿では番組小創設過程を再検討してきた。これまで通説となっていた事柄のうち再検討が必要だと思われたものは、典拠を明らかにした上でこれまでが一次史料に基づいているのかを確認してきた。その結果、番組小創設は府による圧倒的な「上から」の力によるものでもなく、町衆のエネルギーのみによるものでもなく、両者の協力と意見対立、およびその折衷と成果があつて初めて可能となった事業であつたということは、明らかにし得た。また、この「府―町衆」という軸だけでは番組小の創設過程は語りえず、幕末から活動していた西谷や熊谷に代表される京都市中有志者の存在がそこには不可欠な存在であつたことを忘れてはならない。であるからこそ、番組小創設のシンボルとして語られることが多々ある「竈金」は、その有志者の存在に頼ることなく全戸から集金したという点において、際立った存在となるのである。

ただし、本稿ではあくまで文献上で確認できる事柄の整理を行ったのであり、そこから可能となる番組小創設の歴史的意味を問う作業までは試みていない。この作業を進めるためには、番組小を中央政府とのつながり、近隣他府県とのつながりにおいて考えることが要求される。また、学区制度史や地域運営学校としての番組小といった視点から論じるためには、番組小が創設された後の町衆の自治と教育参加まで射程に収めた研究が必要となる。これらについては別

七〇前掲「政治部学政類 第一 京都府」六一―七頁。町衆には「冥加金杯卜相心得候モノ」もあつたようである。



文末資料②

『京都市学校歴史博物館 常設展示解説図録』(第2版、2014年) 21頁より

栖鳳以後の京都画壇

— 特別展「近代京都画壇を育んだ人たち」展示報告にかえて —

森 光彦

平成二五年十一月七日から十二月一〇日にかけて、京都市学校歴史博物館では開館一五周年を記念した特別展「近代京都画壇を育んだ人たち」を開催した。これは、当館が開館以来一貫して取り組んでいるテーマの一つである「近代京都画壇研究」の集大成ともいえる内容のものであった。近代の京都は日本画制作の一大拠点として、多くの画家を生んだ。明治二年に番組小学校が出来てからは、京都に生まれて地元の小学校に通い、後に画家として大成するものなども出るようになるが、その代表ともいえるのが上村松園（一八七五—一九四九）である。松園は四条御幸町西入奈良物町に生まれ、第十一番組小学校であった地元の開智校（現学校歴史博物館）に通った。松園は幼少期から絵を描くことが好きで、担任の中島眞義に勧められ煙草盆を描いた絵を展覧会に出品、結果は見事入賞だったという。また、画家として身を立てた後、開智校で運用資金調達の必要が生じた際には母校のためにと掛け軸を制作している。このように小学校には画家の子ども時代のエピソードが豊富に残り、画家と学校の関係を示す絵画作品も多数存在する。こうして見ると京都には、画塾や画学校はもちろんだが、それ以外にも画家を応援する体

制や日本画作品を受容する場が多く、学校もその一翼を担ってきたことが分かる。京都の町が画家を育み、その画家たちが画壇を育んでいった。京都市学校歴史博物館ではそのような観点から「学校を中心とした、京都の町と画家との関係」をテーマにした展示を行ってきた。「近代京都画壇を育んだ人たち」展で取り扱ったのは竹内栖鳳以後の京都画壇を牽引した画家たちである。彼らは京都の町が持つ「進取」の気風を実によく体现した。今日、竹内栖鳳（一八六四—一九四二）が日本画の近代化を果たした人物として高く評価される所以は、所属する流派の画風を忠実に継承することが絵画制作の目的と化していた幕末の考え方から脱却し、様々な流派の画風を取り入れたり、西洋画の手法を学んだりして新時代に即した日本画、言い換えれば竹内栖鳳の「個性」を作り出した点にあるが、それはまさに明治期の京都が持っていた気概そのものであったといえよう。博覧会の開催、小学校の開校、疏水整備、勸業場や舍密局の創設、電車開通など京都策と呼ばれる都市の近代化政策は、千年の都を時代の先端を行く新たな都市にした。このように近世の体制を大きく変貌させるような近代化に積極的に踏み出せたのは、京都が長い時代を経て盤石の歴史を持っているという自信ゆえかも知れない。と

— 上村松園『青眉抄・青眉抄拾遺』講談社、一九七六

もあれ、こうした新しい時代を突き進む京都の気風が竹内栖鳳を生んだのである。そして竹内栖鳳に学んだ画家たちがその地平を広げた。栖鳳門の画家たちは同門でありながらそれぞれに強い個性をもった作品を描いている。ここには近世という流派制作を重要視する時代から、近代という画家の個性を評価する時代への決定的な変化が表れているといえる。絵師という職人は画家という芸術家へと変わったのである。後に詳しく述べるが、「近代京都画壇を育んだ人たち」展（以下本展）ではそうした時代に活躍した九人の画家たちの代表作を展示し、多様な個性を明らかにしたつもりだ。そして、画家たちの個性を通して京都の進取の気風が立ち現れ、来館者に伝わることが本望であった。本稿では、展覧会の報告にかえて、実際の出品作を例に挙げながら展示テーマを詳細に解説し、栖鳳以後に活躍した画家を紹介していく。

明治の中ごろ、京都画壇では、当時目覚ましく発展していた東京画壇に負けないように、長く日本美術の歴史の中心を担ってきた「日本美術の郷」である京都の美術を進歩させなければならぬという気運が高まっていた。明治二三年に結成された京都美術協会^二の雑誌『京都美術雑誌』では「京都は日本の美術郷であり、東京の美術を

二 明治二三年に久保田米僊、幸野楳嶺らが中心となって結成された美術団体。会頭を京都府知事北垣国道が務め、千総の西村総左衛門や高島屋の飯田新七、川島甚兵衛、並河靖之、岸竹堂、富岡鉄斎、望月玉泉などが参加するなど、京都美術界の中心を担った。同会が行った新古典美術品展では竹内栖鳳や上村松園など多くの青年画家が活躍した。『京都美術雑誌』はその後『京都美術協会雑誌』（明治二五年創刊）、『京都美術』（明治三八年創刊）と改称しながら大正八年まで刊行が続いた。

進歩させるだけではなく京都の美術を改良していかなければ、日本全体の美術を発展させることにはならない」ことが協会設立の理由として書かれている^三。こうして京都画壇では、近世以前の伝統を矜持として守りながら、新時代に適応する新たな絵画表現を追求していった。この日本画の近代化を目指したのは、幸野楳嶺や久保田米僊、竹内栖鳳といった画家たちであった。

その後、明治から昭和にかけて活躍し、日本画の近代化を大きく推し進めたのは竹内栖鳳である。栖鳳は、近世より続く円山四条派の伝統に学びながら、与えられた手本をただ写すだけの粉本主義に陥ることを良しとせず、様々な流派の古画を模写し、西洋の絵画表現も積極的に学んだ。また、写生を徹底して行い、そこから対象の本質を表すための線を慎重に選び取り、洗練された作品に仕上げた。こうした栖鳳の作品制作は、日本画のルーツを確かめながら、目の前の対象をひたむきに見つめることによって、自己表現として形にするもので、流派の画風を忠実に守ることが主な風潮だった当時の京都画壇の中にあつて革新的なものであった。それはまさに、「新しい日本画とはどうあるべきか」の問いに向き合い続けたものだったといえる。栖鳳は、明治から戦前まで、京都画壇の中心として、多くの後進を指導した。栖鳳の革新性や常に挑戦する姿勢は京都画壇を大いに活性化させた。その気風に育てられ、大正から昭和にかけて京都画壇では、上村松園や土田麦僊などの多様な個性が見事に花開いたのであった。本展で紹介するのは栖鳳以後の京都画壇を代表

三 京都美術協会編『京都美術雑誌 第一、二号』文求堂、一八九〇

する九人の画家である。彼らの作品には、栖鳳が育てた京都画壇の精神が確かに息づいている。栖鳳は弟子たちに「師匠の真似をするな」と教えたという。それは、型に拘泥して先達の作品の様式化となつてはならないという教えであつたことだろう。上村松園、西村五雲、石崎光瑤、榊原紫峰、土田麦僊、村上華岳、福田平八郎、徳岡神泉、小野竹喬、本展で紹介するこの九人の画家たちもまた徹底的に写生を行うことで真摯に対象と向き合い、日本画の将来を創造するために先達を学びながら、独自の表現を模索した。彼らの作品からは、新たな日本画の可能性を探求することで、京都画壇ひいては日本の美術界を発展させたいと願う、共通の志が伝わってくる。ここでは、本展出品作を取り上げ、そこに見られる画家の特徴を簡単に述べたい。

上村松園は品格のある美人画を得意とし、理想の女性美を生涯追求したことで知られる。松園はその主題に歴史上の人物をしばしば選んで描いた。《楊貴妃》(松伯美術館蔵)(図1)や《焰》などはその代表的な作品といえる。これらは、歴史を題材にしているが、一人の女性像に主眼が置かれており、歴史の物語を説明するというよりもやはり古今に通じる女性美を追求した作品であるといえるだろう。そうした女性の気品ある美しさを表現するための高い技術が《楊貴妃》には見て取れる。障子の向こうに透けて見える侍女や調度品は淡く柔らかな色彩で描き分けられ、簾の向こうの竹は極めて細やかで清爽さを演出している。また、楊貴妃がかかる流麗な薄物は、透けて見える柔らかな肌を引き立てている。

西村五雲(一八七七—一九三八)は動物画を得意とした。筆勢を生かして大胆に輪郭を捉え、明るく軽やかで、澁刺とした動物を描いた。《梅日和》(木下美術館蔵)(図2)では、動物の体は薄い輪郭線で大胆に形取られ、墨のじみや濃淡を利用して毛並みなどを表している。五雲の動物画は近世から続く花鳥画の流れを汲みながらも、画面全体に近代的な明るさと爽快さが感じられる。

石崎光瑤(一八八四—一九四七)は熱帯の花鳥を題材としたことで知られる。《緑蔭》(福光美術館蔵)(図3)に描かれたインコと芭蕉や《藤花文禽》(福光美術館蔵)の白孔雀(インドクジャク)は、光瑤がインド旅行で見て感動したものであった。帰国後光瑤は、熱帯の力強くきらめく花鳥、それを擁する雄大な自然の風景、木々から漏れる強い太陽光などを大画面屏風に描いた《燦雨》などの作品を発表した。一方で、そうした題材を掛幅に描く際には、熱帯の風物が持つ迫力を小さな画面でも表すため、大胆にトリミングを行い、花鳥を画面全体に極めて大きく描くという構図をとっている。《緑蔭》や《藤花文禽》はその代表といえる。

榊原紫峰(一八八七—一九七二)は《鹿之図》(京料理萬重蔵)(図4)や《雪柳白鷺図》(ミュージアム中仙道)において、伝統的な花鳥画を自分なりに解釈することに挑戦している。《鹿之図》では重心となる岩と樹の組み合わせを片寄せて、右の開放された空間を主要モチーフの舞台にするという伝統的な構図を利用し、山中の鹿の親子を描いている。《雪柳白鷺図》では「柳に白鷺」という中世から続く水墨画の画題に挑戦している。両者では共通して、主要モチーフ

である動物が写実的に描かれている。これは紫峰が行った実物の写生を反映させたもので、精緻に描きながらも下品にはならず、静けさ、清らかさを保つ近代的な花鳥画を作り上げた。

土田麦僊（一八八七—一九三六）の《蓮華》（個人蔵）（図5）は麦僊の自然へのまなざしが如実に表れた作品である。画題は伝統的な蓮池図を踏襲したものである。細く鋭い線で形取られ、薄い緑で均一に塗られた蓮の葉が清浄な気分を与えている。また、蓮のつぼみや花の先に転じられた朱がことのほか美しく、画面に華やかさを与えている。このように、清らかさと華やかさを持ち合わせるという麦僊作品の特徴が本作にも見られる。麦僊は「敬虔な心を以つて自然に跪拝（きはい）することから本当の芸術は生まれる」と語った。現実の自然と向き合い、その中に清浄な理想美を追い求めた麦僊の姿勢が見て取れる。

村上華岳（一八八八—一九三九）が若き日に描いた意欲作《二月の頃》（京都市立芸術大学芸術資料館蔵）（図6）は京都市立絵画専門学校の卒業制作として描かれ、校友会展に出品された。その後、第一六回新古美術展に出品して三等賞となり、また第五回文展に出品され褒状を得た。三つの展覧会に出品されいずれも高い評価を得ており、華岳にとって自信作であったことがうかがえる。本作には華岳の挑戦が見て取れる。自身の眼で見た風景を素直にとらえ、西洋の遠近表現なども参考にしている。その結果、重心をもってそびえる遠山とその手前に田畑が大きく広がる、絶妙のバランスを持った開放的な空間が出来上がっている。まさに風景を俯瞰する気持ち

良さが存分に味わえる作品で、その清新さが当時の高い評価につながった。華岳の写生態度が日本の風景画に新風を吹き込んだ重要な作品である。

小野竹喬（一八八九—一九七九）は「日本の自然は美しい。私は倦くことなくそれを描きつづけた。そしてそれは、いつも創造の世界でありたいと念ふことなのである。あまりにも、日常の繰り返しに、絶えず自己否定をつづけてゐる自分を感じることは、善意に解釈すると、明日への希望をつなぐ、かけ橋かも知れない、と思ふのである。」と語っている。言葉の通り、竹喬は自然の美しさを描き続けた。ゆらめく水面、穏やかに色を変化させる空、悠然とわたる雲、光を浴びてすつく立つ樹木。こうした、日々目にする様々な自然の表情を、淡く暖かな色彩でとらえ、見る者の心に染み入る詩情豊かな風景画にとどめた。その晩年、「日本美の究極は水墨画にある」として、墨彩画の制作に取り組んだ。長い歴史の中で日本人が墨絵に託してきた深い精神性を見つめ直そうとしたのである。《風雨》（高島屋史料館蔵）（図7）もそうした時期の作品。色彩を抑え、墨の階調を生かして柔らかい雨としなる竹を描き分けている。画面全体は温雅な雰囲気満ちており、竹喬のやさしさがよく伝わってくる名品である。

福田平八郎（一八九二—一九七四）の作品は、描く対象を徹底的に観察することで得た確かな写実にもとづいている。また、観察を通して物の本質的な形をとらえ、単純化、抽象化し、普遍的なものとして表した。そうして完成した、簡潔で洗練された造形で構成さ

れた画面は、独自の装飾効果をあげている。平八郎作品の中でも《鴛鴦》（個人蔵）（図8）に見られる波の表現には特にその秀逸な装飾性が見て取れる。洗練された波の形は心地よくなる確に繰り返されることよって、純粹な視覚の快楽となる。それが、時代を経ても見る者の心に新鮮な感動を与えるのである。

徳岡神泉（一八九六—一九七二）の作品は、自然に対する真摯な視線から、対象の形や色の奥にある真理を探究してきた軌跡といえる。象徴的な空間の中に、純化された対象の存在を描く、独自の日本画を作り上げた。《流れ》（京都市美術館蔵）（図9）では、独特の地塗りによってできた象徴空間に、一本の川の流れが存在感を持って描かれている。この作品は「気持ちだけに徹する」ことで生まれたいという。心の眼で見つめることよって現れる、自然物の奥深くに存在する澄み切ったものの姿の中には、神泉がこの世界を愛する心が込められているのではないだろうか。

このように、栖鳳に導かれ、京都画壇の気風の中で九人の画家の多様な個性が開いた。そして、これら画家たちが独自の表現を求め、「日本画とは何か」という問いに向き合ったその姿勢が、後の京都画壇を担う画家たちの道標となり、現在に至る京都画壇を育んできたのである。

近代日本画制作の素材、写生・模写・写真

—— 栖鳳門下、加藤英舟の資料から ——

近代京都画壇において、絵画制作の素材とは実際にどのようなもの

のだったのか。「近代京都画壇を育んだ人たち」展にあわせて展示を行った「近代京都画壇関連資料」を手掛かりに考えてみたい。以下に取り上げるのは竹内栖鳳に師事し、明治から昭和にかけて活躍した画家、加藤英舟（一八七三—一九三九）が残した写生・模写類である。

① 実物と向き合った写生

上村松園は師匠栖鳳に関して以下のように回顧している

先生は常に写生をやれ写生をやれ——と言われた。画家は一日一枚は必ず写生の筆をとらなくてはいけないと言われ、先生ご自身は、どのような日でも写生はおやりになつていられたようである。晩年はほとんど湯河原温泉にお住みになつていられたが、七十九歳という高齢でおなくなりになられるまで写生はなされたと聞いている。私などの縮図やスケッチに駆け廻るぐらい、先生の写生に較べると物の数にもはいらないのである。^四

松園の言葉からも分かるように、栖鳳は特に実物に対する写生を重んじた。それは、江戸時代の円山応挙に端を発する写生画が時を経て、流派が形成される中で様式化し、形骸化していくことに対して、もう一度対象を見つめ直し、時代に応じた新たな写生画を作り出す試みであった。流派における画風を無批判に尊重するのではな

四 上村松園『青眉抄・青眉抄拾遺』講談社、一九七六

く、「写生」というものの意義や内容を問うという姿勢こそを応挙から継承しようとしたのである。弟子であった加藤英舟はその腕を認められ、よく栖鳳に伴われて写生に出かけたという。猿の写生(図10)や鳥の写生(図11)などは、細かい毛描きや野性味あふれる猿の表情が写実的に表され、まるで眼前に動物がいるかのように現実味を持って描かれている。こうした動物の写生には画家が毛の一本一本、変化に富む羽の色、鋭い光をたたえる眼などを緻密に写し取ることで出来る高い技量が感じられる。しかし、こうした写生がそのまま本画になることはないのである。栖鳳は「写生したものが皆絵になるものではない。写生は絵になるものを捜す手段だ」と語った。写生をそのまま本画にすると、過剰な現実感を持つことになり、「現実臭く」なってしまう。それではいけないのである。あくまで写生を材料としながら、そこから必要な線を選び取り、画家が心の内に見た理想の景色として描きだすことが重要であった。

② 栖鳳の作品を模写する

再び松園の言葉を見てみよう。

入塾した当時は、偉い門人の方が多かったのですが、「こりや、しっかりやらぬと——」と決心をし、髪も結わずに——髪を結う時間が惜しいので、ぐるぐるの櫛巻にして一心不乱に先生の画風を学んだり、先生のご制作を縮図したりしたものである。五

英舟の縮図帖の中には、班猫(図12)や蹴合(図13)、アレタ立に(図14)といった栖鳳の代表品を写したもので、栖鳳が得意とした獅子(図15)を写したものなどが見られる。いずれも割合簡略に写されている。縮図に描かれているのは、栖鳳作品の一瞬の動作を捉えた、動的なポーズの作品が多く、斬新なポーズの面白さを学ぼうとしたものであろう。

③ 写真を参考にする

竹内栖鳳や門下の画家たちは写真も参考にして作品制作をしていた。英舟もライオンなどの動物の写真や流れる水の一瞬の表情を切り取った写真などを多数所持していた。英舟の第九回文展出品作《大羽打》(図16)は鶉飼の写真(図17)を参考にした作品である。描かれた鶉はややコントラストを強くした、水墨の濃淡やぼかしによって体の質感や量感が表現され、極めて写実的であり、迫真性を高めている。これは、太陽光が鶉の体に当たって羽毛が輝いていることを表しているものだと考えられる。すなわち、本作にはそれまで日本画であまり描かれてこなかった太陽光が対象の表面に当たって出来る光と影が表されているのである。これは写真を参考にすることで新たに得られた表現であった。ただし、本作では背景や籠は平面的ですっきりとした表現となっており、全体では現実的になりすぎず、品格を保っている。



図1 上村松園《楊貴妃》 大正11年 松伯美術館蔵

このようにして、画家は、写真を参考にして写実的で迫力のある絵画を作っているが、写生と同様、写真をそのまま写して本画にすることは決して望まれたものではなかった。あくまで、「写真のようにリアルな絵」は決して望まれたものではなかった。あくまで、写生を主原料とし、それを助けるかたちで用いられたものなのである。

以上のように、加藤英舟が残した資料からは、栖鳳以後の画家が様々な素材を用いて絵画制作を行っていたことを知ることが出来る。写生や先人の絵画の模写、写真などの素材を得て、それらを探求することで初めて独自の表現が可能となる。こうして画家たちは新たな日本画の表現を探求していったのである。



図3 石崎光瑤《緑蔭》 大正8年 福光美術館蔵



図2 西村五雲《梅日和》 昭和12年 木下美術館蔵

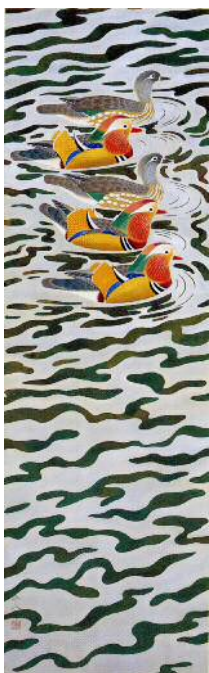


図8 福田平八郎《鴨》 昭和10年頃 個人蔵



図4 榊原紫峰《鹿之図》 昭和3年 京料理萬重蔵



図6 村上華岳《二月乃頃》 明治44年
京都市立芸術大学芸術資料館蔵



図5 土田麦僊《蓮華》 昭和5年 個人蔵



図9 徳岡神泉《流れ》 昭和29年
京都市美術館蔵



図7 小野竹喬《風雨》 昭和53年 高島屋史料館



図 11 加藤英舟《鳥写生》 大正7年



図 10 加藤英舟《猿写生》 明治44年



図 13 加藤英舟《蹴合縮図》



図 12 加藤英舟《班猫縮図》



図 15 加藤英舟《獅子図縮図》



図 14 加藤英舟
《アレタ立に縮図》



図 16 加藤英舟《大羽打》 大正4年



図 17 加藤英舟所蔵の鵜飼の写真 大正4年

団体見学の拡充に向けて

— 平成二十五年度を振り返って —

はじめに

平成二十五年度は、当博物館にとって大きな節目の年であった。開設以来十五年を数え、年間利用者数も二万人に届くほどになってはきたが、これまでを振り返り今後に向けて課題を整理し、新たな展望を描くべき時であると考ええる。館全体としての展示内容や展示方法を、来館者数のさらなる獲得などの課題に加え、団体見学に特化した質的改善や来館団体の拡大に向けての取組の改善も大きな課題の一つである。年度の区切りの総括時期に当たり、団体見学を担当する者として、その現状と課題を踏まえつつ今後の方策を探りたい。

見学団体の実績と内訳

来館団体を分類してみると、大きく学校教育関係団体とそれ以外の団体に分かれる。そして学校関係でも児童生徒、学生などのグループと教職員・PTAなどの社会人のグループに分けられる。学校関係以外の団体としては、生涯教育関係、高齢者福祉関係、旅行社の斡旋による見学団体などがある。平成二十五年度の団体見学の実績は次のとおりである。

総数 事前申込見学 六十六団体 見学者総数 千五百十四名

学校教育関係 小学生 児童館 高校生 大学生 教員研修

教師塾 PTA等 (千百九名)

一般団体

サークル 老人施設 リハビリセンター

旅行団体 カルチャー教室等 (四百五名)

これ以外にも子どもを対象とした主催の事業として 夏休み子ども体験教室（おもちゃの手作り教室・博物館たんけんたい・にほん画に挑戦！・明治の小学校 書写教室） 冬休み子ども体験教室（角風を親子で挑戦！） 春休み子ども体験教室（昔の学校を体験しよう！）などを実施した。

車田 秀樹 小中 秀則



団体見学の利点

団体見学は個人見学にはない利点をもっている。個人で来館した場合、各人の思いや感想で終始するが、団体の場合は百人百様の思いがあり、また捉え方がある。そしてお互いが意見を交流することによって、気がつかなかったことへの深まりや、別の見方に教えられることもある。また、感想の交流だけでなく展示資料を切り口として、他の人の体験を聞き、深めることもできる。

このように、団体見学は来館者の交流の中で質的により一層発展する可能性をもっているといえる。

団体見学の対応例

○映像ホールで概要説明ののち、映像資料の視聴、展示物の見学と解説。

○講義室でプレゼンテーション（施設編・歴史編 各大人用・子ども用あり）

そののち展示室で見学・説明

○（小中学生の場合）全体の概要説明ののち、探検ノートを使用し各自調べ学習。発達段階に応じて、初級・中級・上級を用意。

○（小学校低学年の昔の暮らしの学習の場合）昔話風に「学校昔話」で解説。そのあと、展示見学。

○展示室内の各所にある説明カードを利用しての、見学と解説。

○音楽の先生を招いてのオルガン伴奏とフリートーク。

○要望に応じて、石盤体験教室、かな文字学習、論語教室の実施等。

○企画展に関して学芸員のギャラリートーク 等

団体見学に関する課題

先に述べたように団体見学での来館といっても、小学校低学年から大学生、一般社会人から高齢者までと年齢・世代の幅の広さがある。

また、教育目的での来館だけでなく、旅行コースの一部や福祉の一環としての来館など、求められているものもさまざまである。

このような多様なニーズに対して応えうる受け皿を用意しておく必要があり、これまでも事前申し込みがあつた場合は、来館目的を確認し事前打ち合わせを行ったうえで、それにふさわしいオリエンテーション、展示説明や活動メニューの実施を心がけてきた。今後さらに多様な需要に応えうる、対応メニューの充実が大きな課題である。

また、他の課題のひとつとして、知名度の低さがある。開館十五年を迎えたとはいえ、まだまだ人々に知られていない施設にとどまっている。仮に名前を知っていても、どのような施設内容なのか、どんなことができる施設なのか十分に理解されているとは言い難い。

さらに、一回きりの来館で終わらせてしまうのではなく、リピーターの獲得も必要である。そのためには展示内容の更新、活動内容の多様化、新たな資料の蓄積などが求められる。

今後の新たな取組

活動体験の新規開発

① 昔の授業体験 現在でも石盤体験や作法書の解説などを行っているが、さらに昔の教科書を使った算数の授業やオルガン伴奏による唱歌、昔の国語の教科書を用いた文章読解などが考えられる。

② 昔のニュースフィルムや学習フィルム、学校行事の記録映像などを利用した体験学習の実施。写真資料などは一定蓄積されているが、映像資料は乏しく今後の大きな課題である。各学校や個人所有の貴重な資料が眠っていることが予想される。

③ 昔の子どもの生活文化の体験として、昔の遊びのコーナーの新設。（お手玉、ビー玉、めんこ、こま回し、福笑い、すごろく、紙玉鉄砲、折り紙、など）

見学団体の新規開拓に向けて

児童・生徒・学生の来館を促すには、何といってもまずそれぞれの教員の来館を促すことが必要である。そのためには、教員に来てもらい、見てもらい、体験してもらったうえで、多様な活動メニューを提示することである。学校歴史博物館に行けばこんな活動ができるのだということを実感してもらえそうな仕掛けを用意したい。そのため受皿づくりと合わせて、校長会、教科主任会、教務主任会、新規採用予定者、教師塾などへのPRを積極的に行う。

重点的取組としてのPTAへの働きかけ

学校への協力団体として大きな組織力、動員力をもつPTA団体の来館はこれまでそう多くはなかった。ここに注目し、新たな掘り起こしを行うことは大きな可能性をもっている。地域・保護者の絶大な支えのもとで発展充実してきた京都の教育の歩みを、子育て真只中の方々に当館で再確認していただくことは誠に意義のあることと考える。地元の教育の歩みを直接的、即物的に学ぶことはPTA活動に大きな活力を生み出すはずである。

PTAでは、各種研修会を年間計画の中に位置づけ実施している。各校ごとのPTA研修もあれば、各支部ごと、あるいは京都市全体のPTA研修もあり、それぞれの段階で当博物館の見学を研修メニューに組み込むことは可能である。見学研修によって教育都市、京都の先人の足跡に学ぶべきところは多く、これからの創造的、意欲的なPTA活動のためにも積極的に博物館を活用してほしいものである。

ホームページや情報登録サイトでの情報発信

ホームページや情報登録サイトは施設のイメージ作りや概要を知らせるショーウィンドウであり絶大な力を発揮する。活動内容の紹介、見どころ紹介、体験学習のメニュー紹介、来館者の評価などをアップ

して来館者の掘り起こしを図る。

終わりに

この博物館を、学校跡地を利用した単なる過去の遺物資料の展示施設に終わらせたくはない。先人の熱意を感じ今に生きる我々の心が動く場所として、また懐かしさと共に、今後の学びの意欲につながる活気のある施設としたい。さらに「学ぶこと」は人権獲得の第一歩であり、日本の人権獲得の歩みの中で近代教育が果たしてきた役割は誠に大きなものがある。この様な視点からも、来館者にその意義をアピールしてゆきたいと考えている。



執筆者紹介（掲載順）

和崎 光太郎 当館学芸員

森 光彦 当館学芸員

車田 秀樹 当館博物館主事

小中 秀則 当館博物館主事

『京都市学校歴史博物館研究紀要』第二号の内容

平成二五（二〇一三）年六月発行

論文 京都番組小学校における唱歌教育の導入

和崎 光太郎

研究ノート 平成二十四年（二〇一二）年度における団体見学の現状と

課題

小中 秀則 車田 秀樹

作品紹介 久保田米僊が描いた二つの遊戯図

― 唐子と園児 ―

森 光彦

『京都市学校歴史博物館研究紀要』第一号の内容

平成二四（二〇一二）年六月発行

『京都市学校歴史博物館研究紀要』第一号の発行にあたって

和崎 光太郎

資料紹介 「校地変更及新校地買収交渉ニ関する書類綴（元立誠小学校蔵）」について

小林 昌代

作品紹介 久保田米僊筆《孟母断機図》（元尚徳中学校蔵）について

― 教育における絵画の「用」 ―

森 光彦

京都市学校歴史博物館

研究紀要 第三号

平成二十六（二〇一四）年 十二月 発行

編集・発行 京都市学校歴史博物館

京都市下京区御幸町通仏光寺下る

橋町四三七番地

印刷 株式会社 田中プリント